

HAT-J 北海道支部だより

日本ヒマラヤン・アドベンチャー・トラスト

しれとこすみれ

第 3 号 1999年1月5日



シレトコスミレ
北海道産



ダウラギリ I 峰

フレンチ・パスから

写真と文 齊藤 勤

'98年9月30日、14時30分、ヒマ第7位の高峰、ダウラギリI峰に北海道の岳人4名が8167mの頂に立った。

今回の札幌ダウラギリ登山隊は、無酸素登頂という道内初の輝かしい記録も残した。

遠征隊が組織されたのが'96年の春、50才の隊長以外は23才から32才の若者6名、毎月1回、又は2回の隊員会議が開かれ、積雪期は訓練山行と初ルへ出発するまでの約2年6ヶ月は悪戦苦闘の長い日々でした。

特に、林ヶ海の興部から参加した隊員は、片道約7時間の道を通い続けた努力には頭が下がりました。

HAT-Jの会員にもこれと似た数名の人が居ます。緑豊かな自然を次世代に引き継いで行くためにも頑張ってくださいと思います。

今回の登山隊も、テイクイン・テイクアウトを実践することを登頂成功と同じく考え、これを実行して来ました。

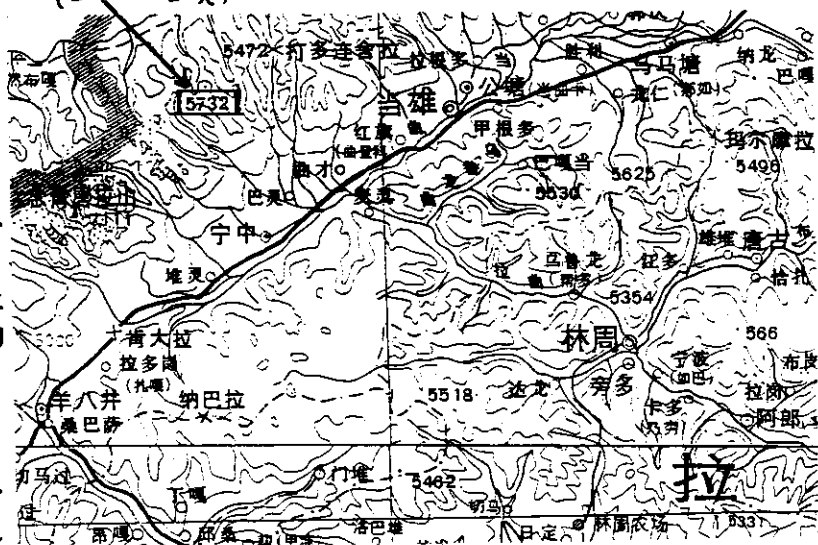
「チベットでのゴミ処理」

(二の山に登頂) 真嶋 花子

「カットの未踏峰に登ろう」と大きな期待をもって8月10日に日本を出発。メンバーは、68歳から46歳の中高年の7名。高所順化を済で行い、いよいよBCへ向けテント・クーラーで出発。しかし連日の雨で川が氾濫、さらに土砂崩れで道路は通行止め。目的地まで行けず、沓に引き戻り、さらに3日もの滞在を強いられました。予備日を3日しか予定していない私たちは目標の山を変更しなければならませんでした。カットの登山協会はどの山に登っても良いとのこと。(結構、いいかげん?)

雨期がまだ明けていないこともあり、当初目標にしていた山の近くのより易しそうな山に変更することになりました。もちろん、未踏峰なのでその山の名前も標高もわかりません。道路の簡易修理も終わり、一路目的地へ。沓から羊八井を経由しさらに東へ。車窓からは、白い峰々のヒマラヤが見えてきました。しかし、その峰々に雲がかかりはじめ、写真を見ながら目標の山を見つけなければならぬのに、山は雲ですっかりおおわれてしまいました。やっと山裾の地形からBCへのルートを見つけ、BCは羊と木の放牧地で、木の家の近くと決定。毎日、子供や母さんが様子伺いに来、すっかり友達になってしまいました。

さて、ゴミ問題であるが、私たちのメンバー5名がNATの会員です。ゴミ処理に関しては、積極的に取り組みました。処理法として、「燃やす」、「埋める」、「持ちかえる」方法を考えたが、たとえ沓まで持ち帰っても、沓には、ゴミ処理する手段



が少ないとの事。確かに沓市内では、掃き出されたゴミが路上に山ずみになっていました。「燃やす」は、この地域の人たちは、燃やすこと(煙を上げること)を嫌うという。残されたのは「埋める」方法しかありません。しかし、隊員を含め10名のゴミを全部埋めるには量が多すぎます。結局、私たちは、BCのゴミは十分焼却し、埋めることにしました。C1は雪と岩なので焼却しました。ビニール袋やプラスチックの容器は毎日の訪問者である、子供たちにプレゼントすると大変喜んでくれました。反省点を書き上げると、C1での焼却は、完全とはいえずBCまで下ろし、生ゴミは乾燥して燃やす方法をとるべきでした。お菓子類の紙包みは平気で棄て、ガラスの瓶は、すぐに割ってしまい、それを楽しんでいる子供たちと一緒にゴミやガラスの破片を拾い、キャンプの跡をきれいにすることができ、白く輝くカットの山を楽しむことができました。

「岩木山クリーンハイクに参加して」

福沢 益子

7月4日21時56分札幌発急行「はまなす」に乗り、これから青森へ出かけるのです。規則的なレールの響きが体に直に伝ってくるカペット列車、空いている仕切りにリュックを降し横になってみる。周りは男性ばかり、学生あり、出張の帰りらしき人あり、紅一点のガキになりつゝ……これは北斗星とは大分様子が違うぞと思ひながら、まもなく眠ってしまいました。どんな所でも眠れる特技が助けてくれます。NEWSに青森支部より岩木山クリーンハイクの知らせが出た時、何故か行こうと決めていました。友人は8合目迄カライクが出来ているからいつでも行けるよとの答え、でも以前青森観光をした時の津軽富士の姿が忘れがたく思っていました。トホ一つ越えたお隣りの支部という気安さも手伝って、早速事務局の加藤様に電話を入れました。行事案内が送られてきて、HATの会員名簿で申し込みをしておきました。「カキは出さなくていいです。お待ちしております。」と添えられていました。やっぱりHATの仲間だと嬉しくなり早速、時刻表を頼りにプランを立てました。

7月5日5時22分青森に到着。途中海峡通過中の放送も知らないで……すっかり明るくなった駅前をブラブラして、6時22分発の弘前行に乗り込み、車中おにぎりや牛乳で朝食をすませると、7時5分には弘前駅前に着いて、ミヨッカで山支度をすませ、弘前バスにて終点国民宿舎岩木荘に向かいました。集合場所の岩木山百沢スキー場駐車場に行くと、丁度八戸よりの貸切バス到着しておりおとしました。青森支部以外からの参加者はいわき市より1名、福島支部より1名と私の3名で、計50名弱の参加者となり名簿とMapが配られ、簡単なストレッチ体操後出発となりました。途中沢の両側



は〈シカゴグ〉の群落でみごとでした。

「このシカゴグはどこが違うのですか」と尋ねると「シカに咲けばシカゴグで、夕張に咲けばカリゴグさ」と明快な答が後の方より返ってきて、カホと納得しました。ゴミは全く見当らず途中クリーン作戦の腕章をつけたグループが、ビン類等の入った袋を持って下山して来るのに出合っただけです。頂上にはガッって展望がきかなかっただけで、広くきれいで神社に参拝をして、15時8合目駐車場に下山しました。途中百沢温泉で汗を流し、おみやげ店で新鮮な山菜を買い、車中カイクが廻って来て自己紹介をしたりして、登山口にあった岩木山神社前で下車しました。弘前行の最終バス迄50分あるからとビールを頂き、バス停でゆっくり飲みながら参加して良かったと、楽しかった一日を思いました。気さくで元気な青森支部の皆さんお世話になりました。又機会をみつけて仲間に入れて下さいね!



斜里岳清掃登山

杉林 仁止

HAT-J北海道支部設立から今年で三年、知床半島の基部に聳える日本百名山の一つ斜里岳の清掃登山を実行。

今年の北海道は雨が多く、あちらこちらで水害があった。そんな時期の清掃登山、道路は9月19日通れないと聞く。私達の登山は9月27日、一週間で道は通れるようになるのか心なしか不安に成り、役場の方に電話を入れると、たいじょうぶですよとの良い返事をいただく。遠く東京、長野、千葉、各方面から来られる方々もこれで満足してくれると思うと安心。

27日は、とても素晴らしい天気めぐまれ、遠くの山々まで見えた。沢あり、急登ありのコースではあるが、それぞれに楽しんでいたように見える。小屋の手前でロープに会い、川の水がどんどん増して行く。これも斜里岳がいかに道東随一の迫力のある山であるかが思い知らされる。

清岳荘が見えると、ズブぬれになりながらもホッとする。

11月16日斜里岳登山小屋焼ける清岳荘の見出し、なんで！この前行ったばかりなのに。「16日正午ごろ、同町管理の山小屋清岳荘（ログハウス中二階建て、約65平方メートル）が焼失しているのを同町内の方が見つけた……」新聞で見てほんとうなんだなと思うと同時に、山小屋は斜里岳登山口から8キロ地点にある、私達遠くから登山しようと思うと、どうしても泊まらなければ登山出来ない山小屋であった。



今から10年ぐらい前であった。冬の斜里岳に登りに行って登山口からのラッパでバテてしまい、おまけに熊をひいて小屋の中で休んでいたのを思いだし、なんとか日本百名山の一つの斜里岳の山小屋を、全国の山を愛する人に見てほしいものだと思う。



斜里岳の清掃登山に参加して

坪原 美治子

今年の夏の北海道は天候が不順でかとした山行ができなかった。9月に入っても余りよい天気が続かず今回の斜里岳清掃登山も心配していたが、下山終了直前で雨に当たる程度で何とか無事終了する事が出来た。

今回は、沢治いを登るコース。沢登りになれていない人のために、地元の清里山岳会の協力を得た。杖をついての進行に加え、山岳会の方のサポートで完全に登ることができました。

地元の山岳会の方の話では、いつもこの時期は、紅葉が素晴らしいとのこと。今年は夏の天候不順と、9月に入っても気温の温度差が無く、紅葉は今ひとつだったが、滝が現れたりして変化に富んだ沢コースを皆楽しんでいるようだった。

沢治いのコースの事もあって余りゴミは見あたらないと思っていたら、沢もとぎれた尾根コースとの分岐上二股の所に、まとめて拾ったゴミが置いてあった。前の人達がゴミを拾ってくれていたのだった。

ここからは、登りも急になり秋の日とは思えないほど気温が高くひと汗かく。

下山してきたグループの人達に「何の団体かしら…？」と尋ねられ。「田部井さんが、代表となって活動している山に親しみながら山の環境を考える。その一つに清掃登山等を、やっているHAT-Jと言います。」「今度は是非HAT-Jの企画に参加してください。」とPRした。

馬の背から急な登りをつめるとやがて頂上頂上から天気の良い日には、国後の島が見えるのだが、残念ながら今回は見る事が出来なかった。しかし、知床の山々を望むことができ皆、満足していた様子。4時間程度で全員が揃い記念撮影。

昼食をすませ正午過ぎ下山を開始する。

長屋リザーより上二股にゴミをデポしてあるので、みんなで、手分けして持って行くように言われていたので、それぞれバックに入れたり、手でぶら下げて持った。

下りは、屋根道のため沢登りの緊張から解放され皆足取りも軽かった。遠くに屈斜路湖が望まれ、道外の参加者らは、カブのジャケットを押していた。

尾根道の両脇のヤブの中には、ゴミ捨ての空き缶がやはりめだつ。また、トル後と思われるティッシュが残っていて「これはいかん!!」と皆渋い顔。トルの後の紙は持ち帰りましょう。

下りあと15分と言う処でザッとにわか雨。雨具を付けるか付けない内に着いてしまった。

それぞれ持ち帰ったゴミを一ヶ所に集めて分別する。雨で濡れたゴミもあり結構がっかり。今回NHKの取材の人が同行していて、私達の活動の様子を撮しながら「山のゴミ問題」としてテレビニュースで放映された。実行委員から総体的には、新しいゴミは少なく、錆びてしまった缶や、空き瓶が多かった事。また、今回含め最近の山は、大部ゴミが少なくなってきたとの感想が述べられた。

最後に、長屋リザーより、遠く道外から参加された方々に感謝の気持と、今度はこちらからも是非、本州で行われる交流登山に参加したいとの希望が述べられ、又どこかの山で再会しようとの話で締められ教会した。

「斜里岳清掃登山に参加して」

東海支部 佐藤 伸一

9月25日、松本空港から空路札幌に到着。
我が故郷である。いつ来ても故郷の空気は私
を優しく迎えてくれる。道内なら、どこに居
ても心おだやかで居られるのが、自分でも不
思議である。

その夜は、実家へは行かず山仲間が経営す
る「遊山荘」へ宿泊するというとんでもない
男である。そして、その足で例の居酒屋「つ
る」で大内氏と再会。つい夜中まで宮崎支部
長らと飲み放けてしまった。話などいくらし
ても終わりなど来るはずもなく、「明日HAT
があるから」と言い訳がましく、未練たっ
ぷりに退散。もちろん帰り際に「また来るわ
」と言い残して。

9月26日、朝8:00同じく東京から前日札幌
入りしていた御大の黒石さんと、集合場所へ
行くと、他の山行グループも集まっており、中
高年登山ゲームを改めて感じながら用意してい
ただいた中型バスへ乗り込んだ。リーダーの杉林
氏の軽妙な司会で和気合々と清里町の宿舎「
緑清荘」へ。近頃この手の宿泊施設が日本全
国にやたらと増えたようで、便利にはなった。

北海道支部に参加して、いつも思う事は、
毎回、その地方（地元）の協力をきっちり
とりつけている点に感心する。東海支部にお
いては、回数が多いものもあるが、地元とは全
く別行動で、独自に活動する事がほとんどで
ある。

HAT-Jの理念として、「啓蒙」があるので、
北海道支部のやり方が本来の方法で、最良の
やり方だと、反省しつつ「俺にはおかない
なあ」と、自分の限界を思い知らされる。そ
の夜の「交流会」も尽きる事なく続きそうで
非常に楽しいものだった。

9月27日、5時起床と言われていたのに、前



夜の不徳で自分では起きられず、皆さんには、
申し訳ない事をしたが、とにかくバスは6時30
分に、登山口の清岳荘へ向かった。支部スタッフ
の組織だった行動に感心しながら、7時26分
出発。いきなり沢の徒渉の連続で、道外から
の参加者はたぶん、前途に不安をいだきなが
ら、この先に何が出て来るか胸がワクワクだ
ったと思う。当の自分も「こりゃ、先が楽しみ
だ」と心中秘かに言っていた。「ヒョとして滝
登りがあったりして」という期待はずれた
が、滝の横1m位の所をロープ伝いに登る旧道は、
何とも応えられない。清掃登山で、こんな楽
しい登山道を選んでくれたスタッフに「やって
くれるじゃないの」とお礼申し上げたい。途中
「仙人洞」あたりだと思うが、岩陰に古いび
びが大量に見つかり、あっと言う間に数袋が
いっぱいになった。他の山域でもそうだが、
昔、山屋は皆んなでびびを埋めて帰った。よ
もやそれがびびとしてHAT-Jの会員に拾われる
などとは考えもしなかった。それどころか、
自分達は「サの良い登山者」だと自負して
もいた。時代と共にサも成長する事を知り、



この先21世紀になれば、ゴミの出るようなものを山へ持ち込む事自体が「マナー違反」と言われそうだ。

この山で気付いた事は、「タバコの吸いカウがない」という事と「ティッシュの花」が咲いていないという事で、これは驚きだったのだが、下山後の管理人さんの話で、ティッシュは常時、気を付けて拾ってくれているとの事で、納得したが、その際タバコも拾ってくれたのかも知れない。東海支部の山行では、いつも「タバコの吸いカウ」には手を焼いているが、愛煙家の自分は「吸っても捨てない」と緒方拳よろしく気を使ってる。「禁煙」の文字が時々頭に浮かびはするが、愛煙家の例から言わせてもらえば、山頂で吸う「いっぶく」は、「一福」であり、幸福な行事なのであって、ご理解いただきたいと思う。要は散らかるなければよいのであるから。

山頂にはトップは、10時40分頃に到着。しかし天気良すぎるせいか、遠方はガスがかかり、期待していた北方領土は見えなかったが、この斜里岳、北側に岩壁があったのが目につ

いた。岩がもろそうだが冬ならおもしろいワトになりそうだと思いつつ下山にかかる。

熊見峠からの急な下山道では、何故か皆んな急ぎ足になり、あちこちでリップや、つまずいて転倒が連続する。自分の足が疲れて上がらなくなっている事に気づかない人がおり、見ていてげげしたのだが、登山より下山の方がむずかしく危険であることを、もっと認識するべきだと思う。安心するのは下りきってからであり、下山途中は、登山時よりも気を張って居なければならない。

この点は、北海道に限らずHAT-J全体で、注意をうながすべきかもしれない。登山口の清岳荘到着は14時50分頃にトップ、最後尾も15時30分頃には到着。ゴミの計量で合計20kg余り。そのほとんどが古いゴミで、埋めていたものが雨に打たれて表面に出て来たものであった。これらの溶け出した成分が長年、沢に流れ出ている事を思うと、やはりゴミは持ち帰りが一番だと思直す。

HAT-J北海道支部の支部長以下、スタッフの皆さんの気持ちの良い対応のおかげで斜里岳を充分に楽しめた事に感謝しつつ、一段ときれいになって山に満足した清掃登山であった。

故郷の山が、今後共美しいままで居られるように、道内岳人の益々のご活躍を願って止まない。
(1998.9.28)



チシマザサ

池永 魁次

日本各地の山には笹の生い茂っている所が実に多い。笹は日本独特の植物で、各国の山には少ない。北海道では、特に積雪の多いにね連峯や大雪山には、*チシマザサ*と呼ばれる根元の曲った笹が、びっしりと林床をうめついている。10月石鎚山系の瓶ヶ森に登ったが、山頂付近は一面の笹原であった。しかし、笹の藪こぎをしようと思えば可能な程度の茎の丈であった。北海道の*チシマザサ*はそうはいかない。藪こぎしようと思えば相当の覚悟がいる。密生しているから身の巾程の空間を作るのにどうしても靴で踏倒さなければならぬ。茎(稈)と言う)に靴を乗せればつると滑る。斜面の笹の藪こぎは危険極まりない。刃取りの人に転落事故や迷いの事故が多いのも*チシマザサ*のせいだ。

人にとってやっかいな笹は、樹木にとっても喜ばれる存在ではない。種が落ちてでも笹に日光を遮られて、発芽することは先ず出来ない。倒木更新などで、日照が充分で、倒れた枯木の養分をせっ取出来る条件が整った時、つまり笹から解放された時、やっと発芽することが出来るのである。

笹は地下茎で繋がっており、茎の途中から刃が出て増えていく。これが成長して稈になるから、一本一本の稈は同じ遺伝子を持っていわば1つで言われる1つなのである。竹は本来熱帯の植物であった。竹と同じ科の笹がなぜ寒い地方に適応出来たのかはよくは分らないが、積雪の深さに大いに関係がある。*チシマザサ*の柔軟な稈は、重い積雪にも体を曲げて耐え、冬芽を巧みに寒さから守っている。春から雪がとけると稈の1つで勢いよく立ち上り、太陽の恵みを他に先かけて早く受け成長を始める。実にしぶとい生き方をする。



ササと竹の違い

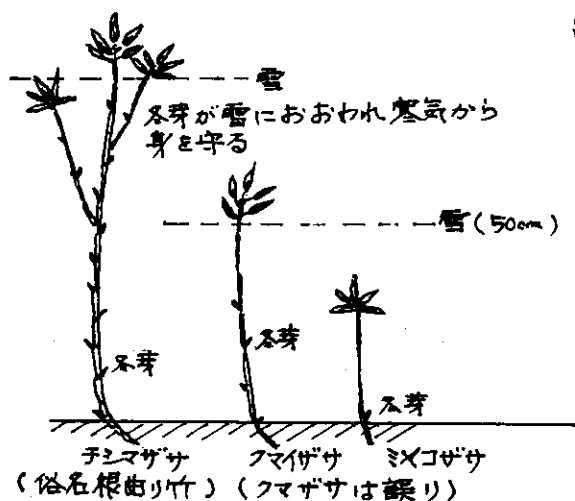
ササ 葉鞘(ようしょう) 竹の皮が剥ける
竹 竹の皮がその年に落ちる 大型

やっかい者の*チシマザサ*もよく考えると、一面では自然や我々に利している。刃を食用にしているのは衆知のことと言及しないが、地下茎ががっちり地表を覆っている事で洪水などの自然破壊を防ぐ大きな役割を果たしている。また、未だ充分には知られていないが、笹そのものの利用としてパルプ材としてこれより紙を漉くことが出来る。良質で腰が強く木材からの紙の如くすぐ破れたりしない。用紙や7-UP紙、さらに名刺台紙や趣味の紙としても雅味あふれる趣きがある。笹は刈り取っても数年すれば元に復するから、資源が乏しくなる心配は、木材よりずっと少ない。輸入材に頼っている木材紙を補う役は十分に務まると思うが、これが未だ大きく企業化しないのは、運賃や加工に経費がかかり過ぎる事にあるらしい。

*チシマザサ*の柔軟く弾力のある性質を利用して、竹細工の民芸品を編んでいる人がいる。青年海

外協力隊員として、*材の奥地で昔の首狩族に竹細工の技法を教えた、当麻町の佐藤由美子さんがその人である。畑作の傍ら専ら自宅の工房で、*一つにこだわって取り組んでいる。一本の竹割刀一つで細く薄く*を割り、柔軟な性質を十分に生かして編んだかごや電燈笠など、繊細な編目と独特の曲線、曲面は、孟宗竹の作品には無いすばらしさがある。

道内どこにでも見かけながら、あまり人々から可愛がられず地味でしぶとい*に注目すれば、資源の貧しい日本にとってさまざまな用途が考えられ、有用植物としての地位が与えられるかも知れない。



1998年度 北海道支部 活動記録

1月17日 新年会

4月25日 総会

《清掃登山 (支部主催)》

6月14日 (日) イソコッパ° (25名) ｺﾞﾐ1.5Kg

伊藤(+)、高木、真嶋、宮崎、
柏木、菊池、大内、杉林、
枝並 (正)、花島 他15名

9月27日 (日) 斜里岳 (43名)

伊藤(+)、真嶋、福沢、増子、
菊池、宮崎、尾崎、坪原、
小林 (君)、米本、杉林、
長屋、五十嵐、松本、枝並 (正)
他28名

10月4日 (日) 和和山 (10名)

宮崎、柏木、平岡、伊藤(+)、
杉林、枝並 (正、夕)、他4名

《個人参加》

5月3～10日 初-ル (ワラ焼却炉、チョブル
りんご園見学)

◎宮崎、福沢、他1名

5月23日 (土) 本部総会 (東京)

◎ 宮崎

5月24日 (日) 新緑ハイキング (福島東吾妻山)

◎ 宮崎

7月5日 (日) 青森支部 岩木山

◎ 福沢

8月21～23日 東海支部 北岳

◎ 宮崎、福沢、他1名

ホロホロ山ミニ・クリーン・ハイク

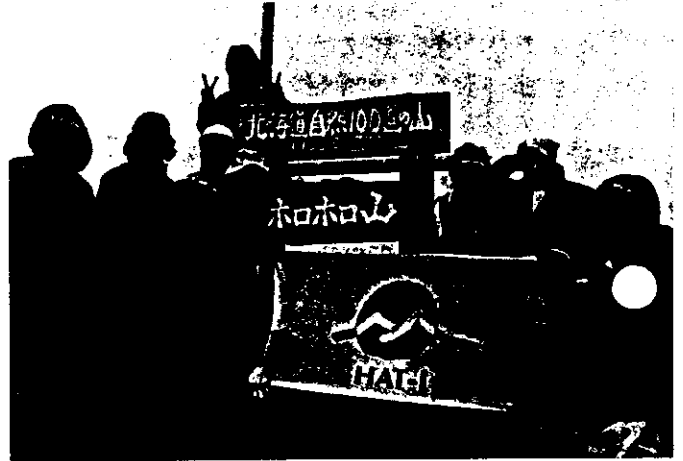
枝並 タカ子

北海道支部今年最後の清掃登山は、10月4日(日)支笏湖近くの和和山(1322m)で実施された。山名の由来は不明だが、周辺の紅葉と頂上からの支笏湖、羊蹄山、無意根山、恵庭岳、樽前山等の大パノラマで著名である。

午前7時参加者12名は、7台2台に分乗し札幌を出発し、紅葉を楽しもうと国道230号線を定山溪、大滝方面へ向かうが、今年の紅葉は天候不順の影響で寂しいものでした。時折激しく降る雨に「晴れて欲しい」と願いながらのドライブでしたが、雨の合間に虹が出て、まるで「大丈夫」とのサインのようで嬉しかった。6月に開通した白老大滝線を通り、三階の滝、白老の滝を車窓から眺め、トマツ林道に入り登山口に到着する9時頃には雨もすっかり上がっていた。

HAT-Jスタイル(腰にごみ袋)に服装を整え、山行責任者の杉林さんの説明を聞き、「ビグの小屋」で登山届に記入し登山開始。ワカブの沢(若い男)を渡渉、尾根道を進むとエウナアイ語の標識が目につく。ウムクノ松(夫婦)、ピリカの沢(乙女)を渡り、5合目手前で林道に出る。

当日は白老町民登山が行われており、広場では町内会の方々が、下山してくる参加者を豚汁で迎える準備をしている。良い匂いが漂い、「我々にもお裾分けが……」と期待しながらウツバの松(後家)、マルラ(浜坂)、ツツバ松(男やもめ)を過ぎ、7合目のカニタイ見晴台(ダカバ林)で休憩。例年なら紅葉で絶景のダカバはすっかり葉を落としていたが、灰白色の木肌とクネクネした独特の樹形はそれはそれで別の趣がありました。カサリのがんば(雷)辺りからハイマツ帯となり、ヤマツのがんば(ねそべる)から急登となる。風が出て



きて雲の流れも速くなり、下山する方が「頂上は寒いですよ」と声をかけてくれる。

11時20分山頂に到着。霧で視界の悪い中、記念写真を撮り、昼食をとっていると、強風と共に霰まで降り出す。食事もそこそこに下山準備をしていると、一瞬霧が晴れ視界が広がり、大パノラマの一部を見ることができ、感動で寒さも忘れるほどでした。山頂にいた人々から歓声が上がリ、先ほど下山したはずの人目も一目見ようと再び登ってくる。

ごみもほとんど無く、HAT-Jの趣旨であるテイクイン・テイクアウトを実践し、白いものも山には残さず、13時15分全員無事下山。再び7台に分乗、四季彩街道沿いの和がけ駐車公園で解散、国道36号線に出て一路札幌へ向かう。

めまぐるしく変化した天候、計5回に亘る虹の出現、エウナアイ語の標識を楽しみながらその時々山の美しさと感動を与えてくれた和和山。来年の清掃登山も積極的に参加しようとの決意を新たにしたい山行でした。

1999年 北海道支部山行計画 (案)

山行委員 杉林 仁止

平成11年度

(1) 第4回 交流登山 北海道支部事業

- ◎ 駒ヶ岳 (大沼)
※森町か大沼に1泊
- ◎ 芽室岳
※帯広地区会員の協力による。山小屋泊。
- ◎ 無意根山
※山小屋泊
- ◎ 富良野岳

四つの候補地から、諸条件を考慮して決定

(2) 春

- ◎ 神威岳 (札幌定山溪手前)
※前日テント泊も可

(3) 秋

- ◎ 札幌岳
※日帰り

山行部として、現在上記のような山行を考えています。

1月の新年会の時に皆様方の意見をお聞きした上で決定したいと思います。

北海道支部新年会のご案内

北海道支部の新年交流会を、下記の通り行いますのでご案内致します。
出席の方は事務局まで連絡下さい。TEL:011-737-9558

日 時: 1月23日 (土) PM7:00~9:00

場 所: 「つる」札幌市中央区南1条西5丁目B1

電話011-231-8357

会 費: 3,000円

編集後記

◆年内中には、ついに発行できませんでした。はやくから原稿を寄せていただいた方には大変申し分けありませんでした。

◆表紙を飾っていただいた北海道支部会員である斉藤勤さんと下間洋司さんがタケノコ山に無酸素登頂という快挙を成し遂げられました。心から拍手を送ります。今年の新年会はお二人の祝賀会も兼ささせていただきます。多くの参加をお待ちしています。

◆昨年「山のトル考」の寄稿いただいた梅沢俊氏が、利尻島南部の海岸近い鬼脇—南浜の草原で新種「リリアガミ」を発見されたというニュースが年末に報じられました。これだけ、多くの研究者が入っているのまたもう一つの快挙に心からお祝いの言葉を送ります。

◆昨年旭岳清掃登山の時にいろいろとお世話になった、大雪山国立公園パークボランティアの岡花さんから「大雪山を語る自然フォーラム」という集会があるので、HAT-Jの会員に告知してほしいとのことで、同封させていただきました。

◆また鹿の話の一つさせていただきます。昨年「鹿の道内総生息数8万頭、プラス14万頭」と書きましたが、道は数を12万頭に決めたようで、その半分6万頭をルターによって射殺するそうです。ルターは肉だけ取って、後は山に放置されるが、鹿がこれを食べ鉛中毒で死ぬ数が増大しています。北海道の先住民族アイヌは、当然狩猟によって鹿を射止め肉は食用とし、皮は靴や衣類に使われ、角は薬になり、捨てるなどありませんでした。飽食の時代とは言え、内地でも数百年前までは鹿肉を食用としていた分けだから、人間界の摂理として、殺生したうちはまるごと綺麗に利用したいものです。

HAT-J北海道支部だより 第3号

発行日	1999年1月5日
発行所	札幌市北区北37条西5丁目1-32 〒001-0037 花島書店内 HAT-J北海道支部
TEL & FAX	011-737-9558
発行責任者	宮崎 初恵
編集責任者	花島 徳夫 増子 麗子